



ニュージーランド便り(4)

道端の露頭の保護と古地磁気測定用 試料採取跡の埋め戻し

河内 洋 佑¹⁾

長年海外にいて、日本へ行ってきた外国人地質研究者のスライドを見る機会が多い。そのなかで多少の失笑を交えて珍しい景色として紹介されるものの一つは、山の中の小さな溪流にまで至るところに造られた砂防堰堤である。日光のような観光地、したがって風景を汚さないことが最も重視されていると思われるところでさえ、男体山の山腹に下から上まで10段、20段の砂防堰堤が醜い姿をさらしている。こういうものを見せられると、日本人の美的感覚はどこへ行ってしまったのかと、思わず目を塞ぎたくなる。日本のような多雨地帯では、特に台風や梅雨時の大雨による出水や山崩れによる被害をなんとかして防がねばならないのはよくわかるが、他にやりようはないのであろうか。

道端の露頭は地質研究にとってかけがえのないデータを提供してくれる。それがめったやたら(としか考えられない)にコンクリート巻きされてしまっているのも、この頃始まったわけではないが、困った傾向である。ニュージーランドではコンクリート巻きでなく、草の種を吹き付けて道路端の斜面を保護しているが、そのため地質学上重要な露頭が隠されてしまうのは困るということで、地質学会として建設省に苦情を呈した。その結果、重要な露頭については過度の吹き付けはしないことになった。これは10余年も前のことである。日本では各種の地層・岩石のタイプ・ロカリティでもコンクリートの下になって見られないところが多いと聞いている。IGCの見学旅行を控えて案内の方々にはさぞ頭が痛いことだろうと思う。過度のコンクリート巻きを地質研究という立場から規制してもらいよう働きかけるべきではあるまいか。

このごろもう一つニュージーランドで問題になっているのは、古地磁気測定用試料を採取した跡の穴のことである。この種の丸い穴は一つではなく多数が近接して開けられているのが普通である。そして古地磁気測定が研究の一手段として普及してくるに従って穴も至るところ

に見られるようになった。誰も行かない山の中ならいざ知らず、観光地や、人のよく行くところなどでは、この穴は大変めざわりである。ニュージーランドでは、穴をあけるなら露頭のかげの見えないところに開けるべきだと考えられている。もしそういうところがなくて、見えるところに穴をあけざるを得ないならば、せめて同質の岩石で穴をふさいでおくべきだと思われる。日本でもこのような合意を早いところ作っておいた方がよいのではないだろうか。ニュージーランドの上述のような合意は法律や規制によるものではない。しかしやたらにゴミをちらかさないということと同質の問題であり、良識として地質研究者が守るべきことであらう。

ニュージーランド国内の地質学上重要な露頭については最近、地質学会が中心になって、数年がかりで一覧表が作成された。そのうち特に重要なものについては、環境庁とも連携して、各級の保護指定がなされている。日本では最近池子のシロウリガイ化石産地の保存運動が行われているが、このような地質学的に重要なロカリティについては常時登録などが行われて、自動的に保護されるようにすべきではないだろうか。私などたまに日本に帰って見ると至るところですさまじい自然改変(大多数の場合は自然破壊)が進んでいて、科学研究は全く追いついていないように見受けられることに驚かされる。フィールドは地質研究にとって何ものにも代え難いものであるとすれば、地質研究者はそのフィールドを保護する責務も負っているであらう。

KAWACHI Yosuke (1992): Letters from New Zealand (4)
—Roadside outcrop protection from concrete cover
and an appeal to geophysicists not to leave unsightly
holes on outcrops when cores are taken for
palaeomagnetic studies—.

<受付: 1991年9月21日>

1) ニュージーランド オタゴ大学地質学教室: Geology Department, University of Otago, P.O. Box 56, Dunedin, New Zealand.

キーワード: 露頭, コンクリート巻き, 古地磁気, コア試料